京大人文研 90年の学知

「何のため」問い続ける

桑原武夫や今西錦司らを輩出し、日本の人文学研究をリードしてきた京都大人文科学研究所が創立90周年を迎えた。異なる分野の個性が織りなす共同研究をはじめとした人文研の独創の系譜と最新の成果を、一線の研究者の寄稿で紹介する。初回は特別編として、岡村秀典所長(考古学)に研究所の来歴や人文学の使命を語ってもらった。

(聞き手・阿部秀俊)

① 岡村秀典所長(考古学)

おかむら・ひでのり　1957年奈良市生まれ。京都大文学部卒。中国考古学専攻。京都大助手、九州大助教授を経て現職。近著に『鏡が語る古代史』『雲岡石窟の考古学　遊牧国家の巨石仏をさぐる』ほか。

東洋学・中国学の研究拠点として外務省が1929年、東京と京都の2カ所に東方文化学院を設立しました。これが人文研のルーツの一つです。ただ、37年に日中戦争が始まると、政府は現状分析的な研究を求めるようになります。この時、東京研究所は従うのですが、京都研究所は、古典学研究を重視する狩野直喜初代所長(1868~1947年)の意向もあって、政府の要請を断るのです。結局、東方文化学院は解体されて京都研究所は東方文化研究所として再出発します。

ただ、時局におもねらず学問の独立を貫いた、と言い切ることはできません。京大は探検大学の異名を持ちますが、原点は翌38年設立の「京都探検地理学会」にあり、会長に東洋学の泰斗、羽田亨・京都帝大総長(1882~1955年)が就任し、大学をあげて海外調査にのりだします。その中心になったのが後に人文研教授となる今西錦司(1902~92年)と水野清一(1905~71年)でした。海外のフィールド調査には資金と政府の許可が必要で、時の行政と密接なつながりを持ちました。また、学術研究と言っても戦時中の中国調査は軍事的な思惑と絡み合っていたことは否めません。その意味で人文研は草創期から、政府や時代の要請と、学問の独立・自由との間で葛藤してきた面があります。

人文研の看板である「共同研究」も、その源流は学術調査という文理の垣根を越えた取り組みに求めることができます。人文科学から自然科学まで多様な学者たちが参加して中国の雲岡石窟(1938~44年)や大興安嶺(42年)の調査が進められ、そこで鍛えられた若手の研究者を中心に、戦後のカラコルム・ヒンズークシ学術探検隊(55年)やイラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査隊(59~67年)が組織されました。

こうしたフィールド調査に限らず、人文研の共同研究は、異なる分野の専門家が意見を交わし、視野を広げていくことに重きを置いています。既存の学問的伝統に縛られ、そこに閉じこもっていては、独創的な研究は生まれません。専門性は大切にしつつ、自由な発想を育む。特に若い研究者にとっては、大きく飛躍できる環境ではないでしょうか。

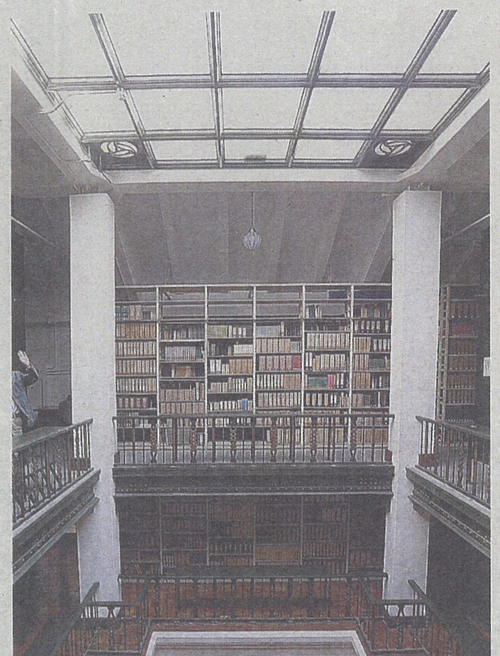
分野の枠組みを超えて

私は考古学が専門ですが、文学や美術史の研究者と一緒に「中国古鏡の研究」という共同研究に取り組んだことがあります。漢の時代の鏡について、その銘文に注目した研究です。考古学者は基本的に文字を読まず、文様などの特徴で分類し、制作年代を考えることに力を注ぎます。銘文には「何か吉祥句が羅列されているだけだろう」とあまり関心を払ってこなかったのです。

ところが実際に読んでみると、夫が戦争に行って悲しむ妻の心情や、恋人に捨てられた嘆きの言葉が、韻文で刻まれていることが分かりました。今の日本で言えば、さしずめ演

京都大人文研の90年

1929	東方文化学院京都研究所(のち東方文化研究所)設立
1933	社団法人ドイツ文化研究所(のち西洋文化研究所)設立
1938	雲岡石窟調査開始
1939	京都帝大に人文科学研究所(旧人文研)設立
1949	3研究所が統合して人文科学研究所発足
1951	桑原武夫らによる共同研究「ルソー研究」
1955	カラコルム・ヒンズークシ学術探検
1959	イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査
1965	東洋学関連の資料を収集・整理する東洋学文献センター設立
2006	市民向け講座「人文研アカデミー」開始
2009	東洋学文献センターを東アジア人文情報学研究センターに改組

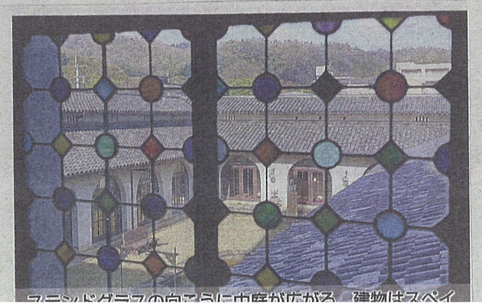


30万冊を超える中国関係の図書を収めた書庫。天窓から光が注ぎ、閲覧を助ける

※内部は非公開

中庭を囲む回廊。アーチ状のデザインが目を引く

北白川の住宅街に建つ白亜の建物、人文研付属東アジア人文情報学研究センター。東方文化学院京都研究所として1930年に竣工



フランドルガラスの向こうに中庭がひろがる。建物はスペイ

① 岡村秀典所長（考古学）

おかむら・ひでのり　1957年奈良市生まれ。京都大文学部卒。中国考古学専攻。京都大助手、九州大助教授を経て現職。近著に『鏡が語る古代史』『雲岡石窟の考古学』　遊牧国家の巨石仏をさぐるほか。

桑原武夫や今西錦司らを輩出し、日本の人文学研究をリードしてきた京都大人文科学研究所が創立90周年を迎えた。異なる分野の個性が織りなす共同研究をはじめとした人文研の独創の系譜と最新の成果を、一線の研究者の寄稿で紹介する。初回は特別編として、岡村秀典所長（考古学）に研究所の来歴や人文学の使命を語ってもらった。

（聞き手・阿部秀俊）

東洋学・中国学の研究拠点として外務省が1929年、東京と京都の2カ所に東方文化学院を設立しました。これが人文研のルーツの一つです。ただ、37年に日中戦争が始まると、政府は現状分析的な研究を求めるようになります。この時、東京研究所は従うのですが、京都研究所は、古典学研究を重視する狩野直喜初代所長（1868～1947年）の意向もあって、政府の要請を断るのです。結局、東方文化学院は解体されて京都研究所は東方文化研究所として再出発します。

ただ、時局におもねらず学問の独立を貫いた、と言い切ることはできません。京大は探検大学の異名を持ちますが、原点は翌38年設立の「京都探検地理学会」にあり、会長に東洋学の泰斗、羽田亨・京都帝大総長（1882～1955年）が就任し、大学をあげて海外調査にのりだします。その中心になったのが後に人文研教授となる今西錦司（1902～92年）と水野清一（1905～71年）でした。海外のフィールド調査には資金と政府の許可が必要で、時の行政と密接なつながりを持ちました。また、学術研究と言っても戦時中の中国調査は軍事的な思惑と絡み合っていたことは否めません。その意味で人文研は草創期から、政府や時代の要請と、学問の独立・自由との間で葛藤してきた面があります。

人文研の看板である「共同研究」も、その源流は学術調査という文理の垣根を越えた取り組みに求めることができます。人文科学から自然科学まで多様な学者たちが参加して中国の雲岡石窟（1938～44年）や大興安嶺（42年）の調査が進められ、そこで鍛えられた若手の研究者を中心に、戦後のカラコルム・ヒンズークシ学術探検隊（55年）やイラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査隊（59～67年）が組織されました。

こうしたフィールド調査に限らず、人文研の共同研究は、異なる分野の専門家が意見を交わし、視野を広げていくことに重きを置いています。既存の学問的伝統に縛られ、そこに閉じこもっていては、独創的な研究は生まれません。専門性は大切にしつつ、自由な発想を育む。特に若い研究者にとっては、大きく飛躍できる環境ではないでしょうか。

分野の枠組みを超えて

私は考古学が専門ですが、文学や美術史の研究者と一緒に「中国古鏡の研究」という共同研究に取り組んだことがあります。漢の時代の鏡について、その銘文に注目した研究です。考古学者は基本的に文字を読まず、文様などの特徴で分類し、制作年代を考えることに力を注ぎます。銘文には「何か吉祥句が羅列されているだけだろう」とあまり関心を払ってこなかったのです。

ところが実際に読んでみると、夫が戦争に行って悲しむ妻の心情や、恋人に捨てられた嘆きの言葉が、韻文で刻まれていることが分かりました。今の日本で言えば、さしずめ演歌のような内容と言ったらよいでしょうか。文献には残らない民間人たちの思いが読み取れたのです。そこに歴史学の知見を動員することで、儒教が浸透していくにつれて、恋愛観や夫婦観にも変化が生じていることが明らかになりました。

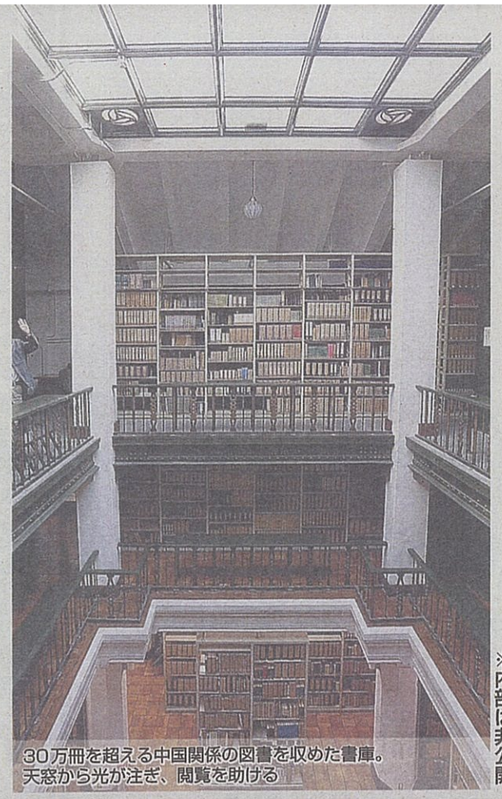
こうした研究は一見、何の役にも立たないように見えるかもしれません。でも、生きること、働くこと、愛することといった根源的な真理について探究することは、価値観が多様化し、技術革新、グローバル化が進む現代にとって不可欠な基礎研究だと思います。新しい技術や制度に対して、「それは私たちにとって何を意味するのか」「何のために存在するのか」と、問い続けるのが人文学です。

今、人文研では、年間30件の研究班が運営されていて、古典研究だけではなく環境や人種、暴力、宗教など現代社会のさまざまな課題に取り組むチームもあります。人文学の対象は非常に幅広く、およそ人間に関わる全てです。だからスタッフには、哲学や史学、文学はもちろん、伝統的な人文学の枠組みを超え、社会学や法学、経済学、さらには科学史や情報工学など、さまざまな分野の出身者がいて、相互に影響し合いながら人文学のフロンティアを切り開いているのです。

＝毎月第3木曜に掲載します

京都大人文研の90年

1929	東方文化学院京都研究所（のち東方文化研究所）設立
1933	社団法人ドイツ文化研究所（のち西洋文化研究所）設立
1938	雲岡石窟調査開始
1939	京都帝大に人文科学研究所（旧人文研）設立
1949	3研究所が統合して人文科学研究所発足
1951	桑原武夫らによる共同研究「ルソー研究」
1955	カラコルム・ヒンズークシ学術探検
1959	イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査
1965	東洋学関連の資料を収集・整理する東洋学文献センター設立
2006	市民向け講座「人文研アカデミー」開始
2009	東洋学文献センターを東アジア人文情報学研究センターに改組



30万冊を超える中国関係の図書を収めた書庫。天窓から光が注ぎ、閲覧を助ける

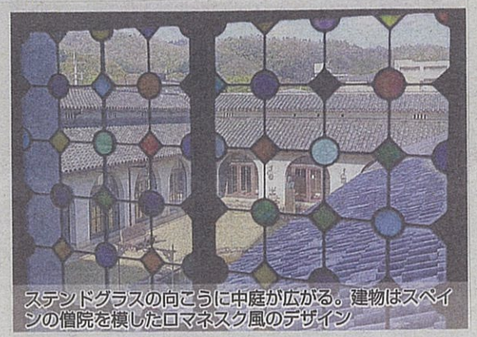
※内部は非公開

中庭を囲む回廊。アーチ状のデザインが目を引く

北白川の住宅街に建つ白亜の建物、人文研付属東アジア人文情報学研究センター。東方文化学院京都研究所として1930年に竣工

竣工当初に掲げられた看板

狩野直喜初代所長の胸像



ステンドグラスの向こうに中庭が広がる。建物はスペインの僧院を模したロマネスク風のデザイン

中庭から尖塔（せんとう）を望む

写真はすべて撮影・水沢圭介

「友情が生んだ大コレクション」休みます